

令和7年度 総合教育会議(第1回) 議事録

- 1 日 時 令和8年1月13日(火曜日)14時30分から16時30分まで
- 2 場 所 佐世保市役所5階 庁議室
- 3 出席者 宮島市長、陣内教育長、松野教育長職務代理、古賀委員、中村委員、西沢委員
松田佐世保市小学校校長会会長、棚尾佐世保市中学校校長会会長
永吉佐世保市 PTA 連合会会長、山口日宇地区自治協議会青少年育成部会長
- 4 事務局 池田総務部長、井上教育総務部長、鳩山学校教育部長、八木子ども未来部長、
細井市民生活部長、花野子ども未来部副部長、尾崎保健福祉部副部長、
木下学校教育部次長兼学校教育課長、藤川学校教育部次長兼学校保健課長、
稲葉学校教育部次長、溝口教育総務課長、田村社会教育課長

【溝口総務課長】

皆様おそろいですので、ただいまから、令和7年度第1回総合教育会議を開催いたします。

皆様におかれましては、大変お忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございます。

私は佐世保市教育委員会総務課長の溝口と申します。

市長に、議事進行を行っていただくまでの間、私の方で進行させていただきます。

会に先立ちまして、まず、本日お配りしております資料の確認をお願いいたします。

本日の資料は、表紙に会議次第が記載されたものと、2ページ目以降が資料となっておりますが、それぞれお手元にございますか。ありがとうございます。

それではここで会の主催者であります、宮島市長よりご挨拶をいただきたいと思います。

宮島市長よろしくお願いします。

【宮島市長】

改めまして皆様こんにちは。また、新年明けましておめでとうございます。お集まりの皆様方には、健やかに令和8年、2026年の新年を迎えること、心からお喜びを申し上げます。

また、平素から教育委員の皆様方をはじめ、お集まりの皆様方には、それぞれのお立場で本市の教育行政の推進に多大なるご支援、ご協力をいただいておりますことに、この場をお借りして、心からお礼を申し上げます。

さて、本日は令和7年度の第1回総合教育会議ということで開催をさせていただきましたが、この総合教育会議に初めてご出席いただく方もいらっしゃると思いますので、改めてこの会議の趣旨、また、制度化をされました経緯についてお話をさせていただきたいと思います。

総合教育会議は、平成26年の法改正によりまして新たに規定をされた会議でございますが、地方公共団体の長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、地域の教育の課題やあるべき姿を共有して、より一層民意を反映した、教育行政の推進を図ることを目的とされております。

今回の議題は、「学校・家庭・地域社会が果たすべき教育機能について」ということで、お集まりをいただきました。

議題の選定の理由といたしましては、教育基本法第 13 条におきまして、「学校・家庭・地域住民など社会を構成する全ての者が、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚し、相互に連携協力を努めるべき」と規定をされておりますが、私は学校・家庭・地域社会の教育機能の役割分担が、ややもすれば曖昧となっており、特に学校に過剰な負担がかかっているのではないかという思いを強めております。

また、本市の教育行政が目指しております基本的な方針を示した「佐世保市教育大綱」の基本理念におきまして、「学校・家庭・地域社会が一体となり、学びの社会の実現を目指す」ということを掲げておりまして、三者が連携補完をし合うという体制は、本市の教育の未来のあるべき姿だというふうに思っております。

現状をどう改善し、三者が連携、補完し合う体制をいかに再構築するかを考えたいために、総合教育会議のテーマとすることといたしました。

今年度はより内容を濃いものとするために、同じテーマで2回会議を開催することとし、今回は、学校・家庭・地域社会にかかる「現状認識」や「原因分析」を中心にお話をしていただければというふうに思っています。

冒頭申し上げました通りに、今回初の試みといたしまして、多角的な課題解決へのアプローチを図るために、教育に係る関係者の皆様にご出席をいただいております。年頭のお忙しいところにお集まりをいただきましたことに重ねてお礼を申し上げたいと思います。

限られた時間になりますけれども、次代を担う子どもたちのために、また今後の佐世保市の教育のさらなる発展に向け、私も市政の中でこの教育の充実というものを、まさに政策の1丁目1番地といたしまして掲げておりますので、どうぞ皆様方の忌憚のないご意見とご指導賜りますよう、よろしくお願いを申し上げます。

皆様方への切なるお願いをさせていただきます、ごあいさつとさせていただきます。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

ありがとうございます。

【溝口総務課長】

市長、ありがとうございました。

それではここから議事に入らせていただきます。

この後は主宰者であります、宮島市長の進行でお願いしたいと思います。

市長よろしくお願いします。

【宮島市長】

ここからは私の進行で会を進めて参りたいと思います。

まずは、「学校・家庭・地域社会の連携」や「佐世保市の小中学校における現状と課題」につきまして教育委員会事務局長の方から説明をお願いします。

【鳩山学校教育部長】【井上教育総務部長】

まずは学校が抱える諸課題ということで、ご説明申し上げます。

各学校におきましては、職員が保護者と信頼関係を構築しながら、また、地域と連携を図りながら、

子どもの成長を願い、日々の教育活動に取り組んでおります。

「誰一人取り残すことなく、学力や社会性を身につけさせたい」と願う一方で、学校を取り巻く諸課題も散見されます。

一例を申し上げますと、まず不登校の問題がございます。

資料は、1 ページをお願いいたします。

全国的な傾向と同様、本市におきましても、不登校児童生徒は増加傾向でございます。

主な原因として、生活リズムの乱れや無気力等が指摘されておりますが、コロナ禍以降の保護者や児童生徒の登校に対する意識の変化等も挙げられております。

教育委員会としましては、児童生徒の「学習機会の確保、居場所づくり」、また、専門家の派遣、保護者の悩みに寄り添う事業等に努めているところでございます。

資料は 2 ページをお願いいたします。

また、諸課題としまして、暴力行為の増加が挙げられます。

全国的に増加傾向、また、低年齢化の傾向でございます。

特に、令和 5 年度から 6 年度にかけましては、小学校での増加が著しい状況でございます。

対人スキルが未成熟で、感情の抑制ができず、衝動的に周りとのトラブルが引き起こされる。

こうした事案が増加している状況でございます。

このような中、各学校におきましては、それぞれのケースに応じた対応に力を注いでおります。

例えば、家庭における生活リズムに起因する不登校であれば、その改善を図るべく、保護者との共通理解を図ろうと試みますし、また、暴力行為が発生した場合は、その再発防止に向けて家庭でもお子さんに教え諭してもらうとともに、お子さんを育む視点で働きかけを行います。

しかしながら、場合によっては、学校と保護者の価値観、教育観の相違から、望ましい改善が図られないケースも散見されます。

教職員のストレスチェックでは、「対処困難な児童生徒への対応」や「保護者対応」がストレス要因の上位を占めており、教職員の心疾患による病休等も増加傾向にあり、憂慮される課題でございます。

学校だけでは解決が困難な案件に対する、学校・家庭・地域の連携協働が一層求められているところでございます。

3 ページをお願いいたします。

そのような中で、現在、教育委員会では、「学校・家庭・地域が連携・協働して、未来を担う子どもの成長を支える地域社会の実現」に向けた取組として、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な推進を行っております。

この活動は、資料の図でお示ししておりますが、学校と地域住民や、自治運営組織のほか、様々な団体との連携ネットワーク化を図り、地域全体で子どもを育む基盤づくりを行うものでございます。

「学校・家庭・地域が協働する基盤」づくりは、教育大綱にも掲げる子どもや、家庭、学校や地域社会の目指すべき育成像の実現に向けて、重要な役割を果たすものと考えております。

4 ページをお願いいたします。

現状と成果でございますが、コミュニティ・スクールは記載のとおり増加をしており、例としてお示ししておりますが、地域の中での学習や、諸行事を通した「つながりを育む場」を創出できていたり、また、地域運営の基盤ができ始めていたりするところもございます。

しかし、一方で、地域学校協働活動として、多種多様な取組が行われているものの、地域と学校で、「将来の子ども育成像のビジョン」を共有できていなかったり、参画者の広がりには乏しかったり、地域から学校への支援活動にとどまっているものが、依然多数であると認識しております。

学校・家庭・地域が連携した「地域社会総がかり」になることの難しさ、そして、「広くつながることの意義」が、まだまだ一般に浸透できていないことが、この施策の有効性を最大化できていない要因であると考えております。

5 ページをお願いいたします。

今後の課題といたしまして、学校・家庭・地域が連携した基盤や地域を増やし、さらに持続させていくためには、「学校・家庭・地域の目線合わせ」、「つながりをつくることが大事だ」という意義を共通認識すること、そして、「自分ができることをやろうとする空気(雰囲気)づくり」が重要と考えます。

具体的な課題としては、地域の中で長期的にリードする「コアメンバーを育成すること」とあわせて、広くゆるやかに誰でも参画できる仕組みづくりなど、「参画者のすそ野をいかに広げていくか」、この点を強化しなければならないと考えているところでございます。

説明は以上でございます。

【宮島市長】

ありがとうございます。

事務局から、地域学校協働推進事業の現状や成果、学校現場における、学級崩壊や教職員の負担増など深刻な問題が生じていることについてご説明をいただきました。

ここで今回お越しをいただきました、教育に関わる関係者の皆様から、学校・家庭・地域社会の現場における実情としまして、それぞれのお立場から、ご自由に発言をいただきたいというふうに思います。

まずは小学校校長会の会長でいらっしゃいます「松田 美穂」校長より、お願いいたします。

【松田会長】

失礼いたします。

小学校長会長松田でございます。

本日はこのような発言の機会をいただきまして誠にありがとうございます。

学校・家庭・地域の役割についてまず、学校現場の実情についてお話しいたします。

小学校の現場が直面している課題は、単一の要因ではなく、社会構造の変化が複雑に絡み合い、教育現場に求められる役割が、高度化・多層化している結果と捉えています。

次期学習指導要領に向けた改定論議を貫く3つの方向性の中の1つに、「多様性の包摂」が示されています。

多様な個性や特性、背景を有する子どもが多くなっている実態に向き合うとともに、こうした多様性を、個人及び社会の力に変える観点、これが指導要領でうたわれています。

その観点から見ると、一人一人の意欲が高まり、可能性が開花し、個性が輝く教育の実現を目指すこと、これが求められていると捉えることができます。

まさしく学校では、特別な支援を必要とする子どもや、外国にルーツを持つ子ども、また集団の中で生活することが苦手な子ども、多様な背景を持つ子どもが増加するなど、子どもたちの多様性が拡大

しています。

熱意があればあるほど、教師はそれら一人一人に寄り添おうと努めます。

それが教師としての矜持でもあります。

学校はそういった教師の熱意によって支えられていると言っても過言ではありません。

個々の可能性を最大限に引き出すための指導は、極めて重要である一方で、教員にかつてないほど専門性と、一人一人に向き合うための物理的な時間が求められています。

多様性の拡大を学びの視点でとらえ、学び合う学習集団の醸成、これは私どもの本分ではありますが、子どもが安心して学ぶ土台となる生活習慣を整える福祉または医療的な機能にまで担う場面に及んでくると教育活動の本旨を圧迫せざるをえない、こういった実情があります。

特に、年々増加している不登校の背景には、いじめなどの要因もあるかもしれませんが、メディア依存や睡眠時間の不足、それに伴う食欲減退などの生活習慣が影響しています。

教室内の多様性が広がる中で、学校は一人一人に応じた丁寧な支援を模索しています。

しかし、生活リズムの乱れや基本的なルールの習得に課題がある場合、学校での集団生活そのものが子どもにとって過度な負担となり、結果として不登校につながるケースも少なくありません。

本来学習の場である学校が、朝の起床から食事、基本的なマナーの定着といった生活支援の多くを担わざるを得ない、いわば生活習慣の形成という役割が、相対的に学校へ期待される比重が高まってくると、社会的な期待に応えようとするあまり、教員の業務が多層化し、学校がそのセーフティーネットとしての機能を果たす場面が増えるにつれ、本来の任務である教科指導や授業研究、また、児童と向き合う対話に当たるべきエネルギーが分散せざるを得ない、こういった状況です。

本来、教師は授業のプロでありたいと願い、研究と修養に努めることを本分としています。

業務の多層化により、担うべき培うべき専門性が損なわれることは、子どもたちの健全育成にとっても損失であると思います。

私が現状として述べたいのは、学校がその専門性を十分に発揮し、子どもたちの健やかな成長を支えていきたい、学校が本来担うべき教育活動に注力できる教育の環境が急務であると考えています。

そこで学校が家庭と共有に努めていることが、「望ましい生活習慣の確立」でございます。

加えてゲームやスマホ利用、SNSに関するルールの設定と徹底は、家庭の協力が不可欠です。

いじめに関しても、SNSを媒体としたものについては、学校での把握が困難です。

家庭におけるこれらの認識、これを学校と共有したいのですが、この認識の度合いが、二極化しているのではないかという側面を感じているところでございます。

以上でございます。

【宮島市長】

ありがとうございます。

続きまして中学校校長会の会長であります「榎尾 吉嗣」校長よりお願いいたします。

【榎尾会長】

中学校校長会の清水中学校・榎尾です。

こういう機会を与えていただきまして、本当にありがたかったなと思っております。

まず学校現場における中学校の代表として今回は出席をしているということで発言内容に関しましても、自校のことはもちろんですけど、中学校全般のこととして、本日は話さなければならないなと思っております。

まず松田会長からもありましたように、小・中、重なっている部分または本当に同じだなと思うことは、もう学校現場の中では当然のこととしてございます。

特に今まで中学校が発達段階において抱えていた問題がだんだんと低年齢化しているということは、先ほど教育委員会からの説明にもありましたように、校内における暴力というところは、小・中どちらかがということではもうないのかなという気がしております。

ただ、小学校の職員も当然ですし、中学校の方も、まず学校の職員として、また学校の本来担うべき業務としてということに関しましては、各学校においてしっかりと果たされているのではないかなと思います。

要整理

その中で中学校現場におきましては、不登校または別室登校というところに関しては避けては通れない現実問題、目の前の喫緊の課題としてございます。

私自身のことを考えると最後に担任したのが平成20年でしたけれど、その時に、子どもたちを褒めていたのは、「お前たちのよかところは、何といっても休みのおらんこと」という話をしていました。もちろん休みが皆無ではありませんけれど、今のような大きな問題としてとか、または理由は何だろうというところあたりが掴めない、というような状況ではなかったのではないかなと思います。

それが10数年経った今、これは社会背景もあるのかと思いますし、保護者も含めていろんな考え方の多様化であったり、またはそれぞれの価値観を尊重するという、この世の中の部分ではあるかと思いますが、1つの理由としては、例えば、学校に入ってきて友人関係であったりとか、何か突然、中学校に入ったからそこから休み出すというよりは、やはり集団に馴染めなかったり、集団生活に不適應であったり、社会性がなかなか備わってなかったりというところを含めて、それが小・中とずっと続いていく、また、保護者もそのような同じような考え方であったり、しかしそれをしっかりと活かすべき場所を確保しなければいけないというところもまた、学校の抱えている課題であるというのが現状なのかなという気がしております。

また、部活動に関する改革というのは、中学校の中ではこれまた避けて通れない、全国的に地域展開等を含めての部分として抱えているところではございますけれど、そこもやはり1つは生徒数の減少において、例えば集団競技においてチームを組めないけど、子どもたちはしっかりと活動したいというニーズがあるというところに関してどうやっていくかと、本市においても、学校保健課を中心として様々なことを考えていただきながら、学校と一緒にタイアップをしていながらということもしております。

そのこの辺りも教員の働き方改革・働きがい改革とはやはり切っても切れないところとしてあるのかなと思います。

その中で、私たちが学校現場において、常々感じるのはどの分野においても、やはりマンパワーの不足ということに関しては、もうこれは本当に痛切な問題としてあります。その中で、与えられた人材の中でどうしていこうかということと、現実問題としてというところの間に、私たちも苦慮しながら、知恵を出し合いながら共有しながらということが、学校現場の実態ではないのかなという気がいたします。

以前と比べると、いろんな出来事を学校だけでなく関係機関であったり、学校の中で言えば、スクールカウンセラーであったりスクールソーシャルワーカーであったりという関係職員の力は非常に大きく

なりました。

ただ、せっかく配置していただいた部分も、やはり何校かをかけ持ちにしていって、週に1回、そこに配置があるというところを考えると、本当に必要な人材としてまた必要な力として、ともに考えていきたいなというときに、もっと配置が手厚くなればというところも実感しているところです。

併せて、SNSのトラブルというところもまた社会の問題として避けては通れませんが、ただそこも、なかなか見えません。ただ、その対応等に求められるもの、やはり学校内で起きる子どもたち同士の中で起きることっていうところに関しては、職員がまたそこに時間をかけて関わってというところで、進んでいくことも現実問題としてございます。

また、避けて通れない働き方改革との兼ね合いであったりとか、またはそのSNSに対する与える部分の保護者の責任においてというところの共通理解であったりという部分を含めて考えていくときに、学校現場の中で本当に今、職員が一生懸命やっている、加えて、地域からも本当にいろんな形で手助けをいただいています。

その辺りの住み分けであったり、役割をしっかりと確認したり、またはこちら側も、助けてという声をしっかりと発信し、またその分を協力できるところは、協力していくというようなところの、住み分けであって共有する部分というところが今後もより必要になってくるのかなと思っております。

以上です。

【宮島市長】

はい。ありがとうございます。

続きまして佐世保市PTA連合会会長の「永吉 秀行」会長からお願いいたします。

【永吉会長】

PTA連合会の永吉でございます。

本日は、このような場に招いていただきましてありがとうございます。

今日は、保護者としての観点から、お話をさせていただければと思っております。

教育というか子育てを学校現場へ、全部丸投げしているのではないかなと、私自身感じている部分があります。

例えばですけど、横断歩道の渡り方など、何かそれって家庭で教えるべきことなのに、学校でそれを教わってくるのが当たり前と感じていらっしゃる保護者さんがすごく多いのではないかなと感じる次第です。

ただ、私が子どもの頃と比べますと今は共働き世帯が非常に多くなってきておりますので、子どもとその会話をする時間というのが、少なくなってきているのではないかなという点が一番の問題に挙げられるのかなと個人的には感じております。

例えばですが、2歳とか3歳といったちょっと手がかかる時期に、どうしても夫婦で働いていたりすると、構ってあげられないので、その時にスマホとかiPadを与えて、動画を見せておとなしくさせることがあると思います。

これがそのまま延長してきているような現状もあつたりするのかなというところで、私たち保護者の意識改革というのが、すごく求められているというところは認識をしておりますが、どうやってその保

護者の認識を変えるかというところがあります。

私はこのPTA活動を通じて様々な場に出席することで、知識や共感させていただく点などを教えていただいて、それは今度我が家の子育てに生かそうという発想の転換ができて、PTAって素晴らしいなと思っているのですが、なかなかそのような場に集えない保護者さんっていうのが大多数いらっしゃるというのが事実であります。

どのように活かしてそういった場に集まっていけるような施策なんかを取り入れていくと、保護者さんの意識の変化に結びついてくるのではないかと感じております。

あと暴力行為の増加というお話がありましたが、その点でもやはり家庭内での会話不足というか、もちろん悪いことなので、その保護者さんっていうのは、子どもがやっていることを多分知らないのだと思います。聞いて初めて「うちの子が、そんな他人をいじめていたのですか」みたいなことがどの家庭でも起きている現状だと思っています。知っていて、それを同調するような保護者さんは絶対いないはずですよ。

そういった点からいっても、家庭内でも会話不足というか、日頃から子どもを見ていると、何となくちょっと雰囲気が違うとか、今日は何か帰ってきて様子が違うなというのは気づくはずですが、それに気づけないというのは、自分の忙しさに、言葉はちょっと悪いかもしれませんが、かまけてというか、子どもと向き合っていないというのが、一番の問題点じゃないのかなというふうに感じている次第でございます。

【宮島市長】

ありがとうございます。

最後に、日宇地区自治協議会青少年育成部会長、佐世保市青少年育成連盟副会長であります、「山口 龍虎」様より、よろしくお願いいたします。

【山口部会長】

日宇地区自治協議会青少年育成部会長の山口でございます。

本日、発言の機会をいただきまして、本当にありがとうございます。

私の方からは地域の現状について、少し学校と地域の視点の方から、実情についてお話をさせていただければなと思っております。

今、地域では、担い手不足と高齢化が進んでおりまして、従来のように地域活動を維持することが難しくなっているという現状はございます。

自治協議会、佐世保市の方に27ヶ所ございますけれども、この設立もそうした動きの中での取組の一環だったのではないかなと考えているところです。

ただし、これは地域に力がないという意味ではないと考えております。

実際にはスポーツ指導者それから文化活動の担い手、企業人材、それから、退職後の専門職など、多様な専門性が地域には確実に存在しております。

問題は、それらの人材が学校に届く「制度的な経路」、これが整っていないことではないかなというふうに思います。学校側から見ると誰に頼ればいいのか分からない、地域側から見るとどう学校に関わればいいのか分からない。この両方向の迷いが、地域資源の活用を妨げているように感じられるところで

あります。

さらに自治会、PTA、それから地域学校協働本部などの複数の組織が縦割りで動いているために、活動が点で終わって、それから地域全体としての教育力が循環しないような形を生んでいるようにも思われます。

地域には力があるのにそれを束ねる中間層、この仕組みが弱い、ここが教育の再生を考える上での大きなボトルネックになっているのではないかと、我々としては考えているところでございます。

以上です。

【宮島市長】

はい。ありがとうございます。

これからは皆様方と協議する時間にしたいというふうに思います。

ただいま 4 名の皆様方からは、まさに今の教育課題の核心部分というものをお聞かせいただいたような感じがいたします。

学校に過度な負担が偏っているという状況、また、家庭における問題、また、地域の関わり方、本当にそれぞれ改めて課題があることを感じさせていただいたところでありますが、それぞれ教育委員の皆様方からもご意見をいただきたいと思います。

まず、松野委員よろしいですか。

【松野教育長職務代理】

教育委員の松野です。よろしくお願いします。

まず、私の方からは、教育基本法の第 1 条において、「教育の目的は、人格の完成を目指すことである」とされておりまして、もともと学校は学習指導だけではなく、生活指導面でも非常に主要な役割を担っていたということがありまして、教師が児童生徒の状況を総合的に把握して、指導支援を行うことで、子どもたちの知・徳・体を一体として育て参ったということです。

このような形で、子どもの成長に寄与し、子どもと感動を共有できることが、教職員としての魅力であり、やりがいでもあり、それが本来の姿ということで、学校現場では多くの先生方が自負心を持って、子どもと真摯に向き合い、親身になって関わりながら、専門職としての教育に携わってきておられます。

しかしながら、社会の構造的な変化に伴い、価値観も多様化し、家庭、地域、あるいは行政からの様々な求めがあり、それに応じていく中で、多くのことを抱え込み、個々の対応も非常に難しくなり、先ほど校長先生方から学校の実情についてお話がありました通り、学校及び教師の負担は非常に増大して、本当に疲弊をしているというのが現状ではないかと思えます。

現在、働き方改革の推進によって一定の改善も見られますが、教師の本来の仕事である授業や児童生徒との関わりに集中できる環境を整えるためにも、やはり学校及び教師が本来担うべき業務の範囲をさらに整理して、曖昧になっている三者の機能の境界線を明確にして、相互に補完し合う体制を作ること、やはり私自身も喫緊の課題であるととらえているところでございます。

以上です。

【宮島市長】

ご意見ありがとうございます。

次に古賀委員、よろしいでしょうか。

【古賀委員】

よろしくお願いいたします。

私からは、保護者の立場として感じている部分と、幼稚園・保育園で仕事をしておりますので、そこで気づいた部分、ボランティアを通じて気づいた部分をお話しさせていただきたいと思います。

「共働きが増えた」だったり、「核家族が増えた」だったりというのがありますが、家庭において子どもとの向き合い方が各家庭で違ってきているのではないかと感じております。

それが「しつけ」ということになるのかもしれませんが、それぞれの各家庭で考え方が違うので、学校で集団生活しても違いが出てきて、先生たちもまとめるということが難しくなっているのではないかと感じています。

ボランティアを通じて感じていることですが、先ほどお話があったとおり、敷居が高いわけではないのですが、「保護者としてどういうふうに学校にお手伝いができるのか」、「私にできることは何か」というのが、わからない保護者の方もたくさんいらっしゃるのかなと感じております。

また、「私にはできることはない」とか「私には無理」とか、最初から諦めている保護者さんもいらっしゃるのかなと思います。

実際に活動をしていただくとしっかりしていただいておりますので、その辺りの意思疎通などをもっと密にすることで、学校からのお願いといったものも、保護者さんは受けとめやすくなったりするのではないかと感じております。

以上です。

【宮島市長】

はい。ありがとうございます。

次に中村委員よろしいですか。

【中村委員】

教育委員の中村でございます。

本日は、貴重なご意見をお聞かせいただきありがとうございます。

私も本当にこの学校・家庭・地域社会の役割について、今何らか見直しが必要な状況になっているのではないかと危惧しております。

また、教育委員会の会議の中で、市議会での議事録を拝見させていただく機会もございまして、特に鶴大地議員の質問を読ませていただいたら、現場の切実な状況をよく酌み取っていただいておりますので、非常に勉強になったな、参考になったなと思っております。

学校現場が大変だということを、マスコミは視聴率を上げるといいますか、そういうのに力を注がれるので、必要以上に先生が大変だっていうのが報道で取り上げられて、本来だったらもっとたくさんの希望者が集まって、その中から優秀な方だけじゃなくて、心身ともにタフな先生がもっと採用できるの

かもしれないのが、今のマスコミの傾向では、大変さばかりが強調されて、志望者数の減少や、せっかく合格しても辞退するという方が多いといったことに繋がっているのではないかと危惧しております。

その実情と同時に、この現場が本当に大変だということを何とかしないと、先生方の本来の業務で活躍していただくことも難しいですし、これからも新しい人材を確保して育てていくということも難しくなりますので、何らかの解決する必要があると思っております。

三者の役割分担の境界線について、曖昧になっているところの問題意識を、今日場で共有することができて、その解決策などもこれで見つけていくのではないかなと、期待しているところであります。

先生方を守るための制度や、教職員の方々の魅力をもっとちゃんと育てていくようなことも、今できることがあるのではないかと思います。特に、市長は1丁目1番地とおっしゃってくださっていますので、そういう問題意識の共有と期待を込めて今思っているというのが、私の実情のご意見でございます。

よろしくお願いいたします。

【宮島市長】

はい。ありがとうございます。

西沢委員いかがでしょうか。

【西沢委員】

よろしくお願いいたします。

私もこの境界線が曖昧になっていることについて、なんでなのかなというのをいろいろ考えて、結論はもちろん出ておりませんし、色々な問題が複合的に絡み合っているということはわかった上でお話しさせていただきます。

これが問題ではないかと思っているところが、特にコロナ禍以降、これはもちろん子どもだけではなくて大人もそうなのですが、コミュニケーションのとり方であったりとか、他者との関わり方がわからなくなっているというか、コロナ禍の間やらなかったうちに忘れてしまったりということがあると思います。

時代が巡れば価値観も変わっていくので、大人も子どももわからなくなっているのではないかなと思っております。

特に子どもが「地域や家庭で体験する、遊ぶ、学ぶ」といったところをしないまま学校に行ってしまうと、先ほど永吉会長がおっしゃられていらっしゃいましたが、本来であれば学校ではなくて家庭で教えるなければいけないことも、学校の中で学ぶというような状況が出てきているのではないかなと考えました。

成長の中ですごく大事な機会を、今の子どもたちは失ってしまっているのではないかなというのが1つあります。

もう1つは、これももちろん大人も同じだと思いますが、我慢したりすること。昔は「我慢なさい」とすごく言われていたと思いますが、今は価値観が変わってそういうことをあまり言えなくなっているような時代になっていると思います。

「多様性という言葉の独り歩き」というか、私はこういう個性だからこれはしませんというのは極論で

はありますが、個性や多様性という言葉だけが独り歩きしてしまっていて、我慢をすることや、足並みをそろえることといった教育の根っこの部分というのが、もしかしたらやりづらくなっているのではないかと思います。

それに伴って他者理解をするための対話もできなくなっているのが現状なのかなと考えております。以上です。

【宮島市長】

はい。ありがとうございます。

教育委員の皆様方からそれぞれご意見をいただきありがとうございました。

今の議論を踏まえまして教育関係者の皆様方からも、何かご自由に結構ですので、ご意見ございませうでしょうか。

永吉会長。

【永吉会長】

皆さんのお話を聞いて個人的にですが、私も「価値観」というものをすごく大事にしないといけないなと思っております。

今日話を聞いて私が感じたのが、価値観の違いを認めつつも、その中で何点かをピックアップして、これを全保護者と共有できるともっとより良いものになるのではないかなと思っております。

例えば、「人を思いやる」ということや「人を傷つけない、人を傷つける」ということはどういうことか」ということは絶対に保護者として子どもに教えていく。

他は価値観の違いですから、各家庭の教えに委ねる。例えばこの2つ3つっていうのをピックアップして、「ここだけはPTAの保護者の皆さんは、各家庭で子どもさんに伝えていって欲しいです」というところを、全面的に打ち出していくと、意外とずっと入ってくるものがあるのではないかというのを話を聞いて感じました。

【宮島市長】

他にございますか。よろしいでしょうか。

教育長の方からお願いします。

【陣内教育長】

教育長の陣内です。今日はありがとうございます。

今、学校、PTAそして地域社会の最前線で頑張っている皆様のご意見聞かせていただきまして、同意とか同感じゃなくて、共鳴・共振、何か震えるようなものを感じて、とてもうれしく思いました。

私の方からは、皆さんと全く同じ考え方であるという前提の上で、あえて私がこの学校・家庭・地域社会の役割が曖昧化してきているというご指摘の中で感じている危機感を2つお話させていただきたいと思っています。

先ほど松田会長の方から、多様性・包摂性という観点でのお話がありました。そこに共通する部分が

あるかと思いますが、文科省が1年前に出した資料で愕然として大変ショッキングに感じた資料があったのですが、「35 人学級の中にこんな子が何人いる」という資料になります。

35 人学級の中に、不登校もしくは不登校傾向の子どもが、4.8 人いる。これは平均値ですので、もっと多いところも当然あるということになります。

ギフテッドと呼ばれるような特異な才能のある子どもが 0.8 人いる。

学習面や行動面で著しい困難、不適を示す子どもが 3.6 人いる。

家庭に、子どもたちが読める本の冊数が著しく少なく、学力が低い傾向のある子どもさんが、35 人中 12.5 人いる。こういった数字が示されました。

これだけ多様性がある中、包摂性を踏まえて、子どもたちを誰一人取り残すことなく支えていかなければならないという、改めて「覚悟」が示された資料でした。

ギフテッドの子どもがいらっちゃって、今までそんな子どもさん、どんなにわかっていても、「ちょっと待ってね。みんなが解けるまで待ってね」と言っていたのを、その子なりに伸ばしていくことはとっても良いことです。

ところが、不登校の 4.8 人とか、著しい問題傾向を示している 3.6 人、この子どもたちは決して良いこととは言えないです。

できれば、家庭であったり、地域であったり、いろんな方々の支援がもっと早く、もっと届いていれば、この数はおそらく少なかったのではないかなと思えるわけです。

そう思うと、この学校・家庭・地域社会の果たすべき役割分担が曖昧になって果たせていないということについて、私が大変心配なのは、「子どもたちの可能性を摘んでしまっている」、ここがとっても心配に感じています。

それからもう 1 つ心配なことがあります。

子どもが困っていたら、手を差し伸べます。教員は、いや、大人は。当たり前ですよ。困っていたら、泣いている子どもを見たら「どうしたの?」、転んだ子どもがいたら「大丈夫?」、そんな声をかけるのが当たり前ですよ。

ところが先ほど、永吉会長さんが市P連会長の立場でよく言ってくださったのと、涙が出るぐらい感謝しておりますが、「保護者が学校に丸投げしているって言ってもいいような状況があって申し訳ない」という言葉を使っていただきました。

そういった中で、一部の保護者さんが、本来、家庭でもすべきことを、学校にある意味丸投げして、「学校は何しているんだ」という批判をされるときがございます。

先生たちは、これは家庭がすべきだから学校はしなくていいとか、みんな思っています。当然、子どもが困っていたら、手を差し伸べるのですが、差し伸べている自分、差し伸べている学校に対して、学校は何しているんだと、本来一緒に責任を負うべきはずの方が学校を責められるということの、精神的な辛さですね。

「先生ありがとう。家でしきらんことばもう学校でしてくれたけんありがとう」って言われれば、「いやいや当たり前です」という言葉が出るものですが、「本来学校の前に家庭が」と思えるようなことを、「学校は何しているんだ」と責められる辛さ。これが、先生たちのモチベーションをどれだけ壊しているのかなと考えるところです。

皆さんからお話いただいたことは全てその通りだし、今お話をさせていただいた2点は、すごく子ども

たちの可能性、そして先生たちの働く意欲、教師としての矜持、そんなものを壊してしまわなければいいなと思って、何か胸が痛くなっているような気がしたところでした。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。

私の方からも少しお話をさせていただきたいと思いますが、その前にお聞きをしたいことがあって、今、各スポーツ団体の新年会にも出向いていますが、その中でちょっと気になったのは指導者の方から部活に入る子どもたちが非常に少なくなっているというような話、昔だったら、7割ぐらいはもう部活に入って何かの活動をしていたのに、今は帰宅部と言われる人がものすごく増えているんですよというような話をされたのですが、実際はその辺りどうなのでしょう。

【榑尾会長】

帰宅部というか、クラブチームといった他の選択肢が出てきたというところが、以前からすると大きな違いかなと思います。

ただ 1 つ、部活動自体の成り立ちが、例えば、野球だと1校で9人いないと試合が成り立たないという中で、9人が実際にはもう組めないというところ、またいろんな中体連のルール等で「複数合同部活」という足りない学校同士が組んでいたが、その足りないもの同士でも、もう組めなくなってきたというような状況です。それと同時に、今国の施策として、地域展開であるとか、またはいろんな競技団体において、クラブチームが出てきたところにおいては、今までの部活動一辺倒で、中学生であれば部活動しかなかったというところからすると、選択肢が増えてきたという現状を踏まえての発言なのかなとは思っています。

【宮島市長】

そのことによって集団行動、もちろん学校に行っていること自体が集団生活を学ぶことなのでしょうが、部活動を通じたいわゆる「共感」みたいなものを、持つ機会が少なくなっているという感じはされますか。

【榑尾会長】

実際に私たち学校現場として子どもたちを見るときに、部活動で得るもの、また、私たちが直接関わるところが、なかなか目に見えないということは現実問題としてたくさん感じます。

やはり、クラブチームの良し悪しということは別として、そういうところに集まると、どうしても技術志向であるというところも、また否めない事実なのかなというところもあります。

学校の中での私たちが関わる場所というのが、具体的に減ったり、集うところによって、私たちが直接的に教師として声をかけたり高めていくというところのケースが減ってきているのも、また事実かなと思います。

【宮島市長】

ありがとうございます。榑尾先生は長年バスケットボールの指導をされていて、私も熱血教師としての先生を拝見してきたので、なおさら、思いも色々おありになるのではないかなと思いますけれども。実情はわかりました。

あともう1点、教育現場の中で「DX」について、民間はもとより行政の中でもかなり積極的に取り組んでいる課題ではあるのですが、ややもすれば教育現場の中でその部分というのは、遅れているのではないかという感触を持っているのですが、そういう認識というのはどうなのでしょう。

【松田会長】

ありがとうございます。

確かに、小学校の場合でいくと、1年生2年生ももちろん端末を使います。プログラミングも授業に入っていて、「クラスルーム」というアプリから入ってデータを取り出して問題を解く。あと、「ミライシード」というアプリは子どもたち大好きで、どんどん触って、AIドリルに取り組んでいるようなところで、さほど大きく遅れているという感じはしません。

ただ、AIの活用であったり、高学年にプレゼンの能力をつけたりといった部分を見ていると、十分備わってきているのではないかと思う部分と、社会の動きからすると、もっともっと身につけさせなければいけないのかという部分があります。

特にコミュニケーションツールとしてのスキルの部分とマナーの部分、情報リテラシーのところが、両方をきちんと育てていかないと、本当の意味でのDXを活用する能力というのは育たないのではないかなと思います。

そういった意味でいくと、まだまだという部分がゼロではない、かといって、低学年はそれより大事なこともある。生活習慣もしかり、あと、字はしっかり書かせたい、もちろん画面にタッチペンで書かせたり、漢字も書いたりするのですが、そこら辺の迷いはあります。やはり声に出して読む、それからしっかり自分でペンで書く、そういう部分を全くゼロにはできないのではないかな。

小学校は6年間ありますので、発達段階でのスキルというのは大きく違いが出てくるので、日々子どもたちを見ながら、また、社会を見ながら、リテラシーのプログラムとかを見直していかないといけない、そういう思いはあります。

【宮島市長】

ありがとうございます。

もう一方で、学校の業務の中でできるだけ業務量の軽減をするためのDXの導入という意味では、まだまだ改善の余地はあると思われますか

【松田会長】

まだあると思います。

ただ、20代30代の若手職員は優れています。やはり世代格差というのは、どうしても否定できません。

もちろん、50代であっても、パソコンは一定使いこなしますが、授業への取り込み方とか、業務の効率化という面からいくと、若手は素晴らしいです。習得するスピードが違います。

組織としてDXを進めていくという部分は、校長のマネジメントとして、私たちの役目かなというふうに思います。

【宮島市長】

ありがとうございます。

永吉会長にお聞きしたいのですが、家庭の中で先ほどご指摘いただいたように、熱心に活動されているPTAの方はたくさんいらっしゃる、本当に我々の時代とは打って変わって、保護者の方が非常に積極的にやっぱり教育に関与されているなという認識はあるのですが、一方でそうではないという方もいらっしゃるということですが。

そういった方をこう巻き込んでいくっていう、色々な工夫をされていらっしゃると思いますが、何かヒントとなるような事例なり、取組なりはありますでしょうか。

【永吉会長】

はい。ありがとうございます。

正直申し上げますと、私もいかに来ていただけるかというところが一番、悩んでいるところではございます。

ただそんな中でも、例えば、子ども向けのイベントには親御さんというのは積極的に参加される傾向があるのかなと感じております。

特に、中学校、高校になるとどうしても部活動等で忙しくなれることが多いので、なかなか子ども自身も時間が取れないとかあるかと思いますが、それ以外の保育園・幼稚園・小学校時代というのは、イベントがあると親子で参加してくれる傾向がすごく強いかなと思います。

企業でもそのようなイベントをよくされる企業は、佐世保市内にたくさんあるかと思いますが、そのようなイベントで、例えば子どもには、子どものイベントをやってもらい、親御さんには別に親御さんに聞いて欲しい話を聞いてもらうという、同じ時間の中で子どもと親を分けてやっていくと意外と参加してもらえて、親としては学びを得られ、各家庭に持って帰れるのではないかなと感じているところでございます。

【宮島市長】

ありがとうございます。

山口部会長にお聞きしたいのですが、コミュニティ・スクールもだいが増えてきていて、新たに参画をしようという地域も増えてきていることは大変喜ばしいことです。

改めてではありますけども、地域との関わりの中で先進的にやっておられる地域も佐世保にはありますが、そういうところというのは情報共有がかなり進んでいるような感じはありますか。

【山口部会長】

今までのお話にも出てきたように、課題自体は共有できますが、そこからどう進めていくかとなったときに、若干の地域差はあるのかと思います。

私が所属しております日宇地区に関しては、中学校 1 校、それから小学校 3 校というところで、連携

というのは比較的うまくいっており、かつ自治協議会が起点になっているというところもありますので、その辺り参考にできるのではないかと思います。

これから考えていかなければいけないのは、従来の学校教育と社会教育の役割が、これまで学校教育が主で、社会教育が若干地域の一部のようなところがありましたが、これが少し同等か逆転するぐらいの位置付けになってくるのではないかと感じているところです。

要は、社会教育の中に学校教育も含まれるという視点でものを見ていくと、今まで課題として出てきた皆様の意見というのも、社会の中で子どもたちを育てると同時に大人も育てていくという視点を持てば、その中の一部として学校も制度として機能するという形に持っていくことで、制度的に地域の方々の意識も少しずつ変化の兆しが見られるのではないかとということです。

そういう意味では学校にすべて頼るというような、制度として学校に頼るというところから、社会で人を育てるという視点へ持ち込むことによって、少し変化が起こるヒントにはなるのではないかと思います。今進めているところです。

以上です。

【宮島市長】

質問に答えていただいて本当にありがとうございます。

それぞれ今、教育委員の皆様方からもお話がありましたけれども、昔の教育と違ってやはり学校にいろいろなことを頼っている。特に以前であれば、学校で教える範疇というのは、極めて限定的だったというか、「多様性」という西沢委員のご指摘もありましたけれども、その辺のことが社会の常識になって、学校に非常に過度な負担がかかっている。

また、今質問をしたように、その中で、色々な手段も含めて、新しい時代になって、そういったまた負担も増えているというような中で、本当に学校の先生方のご苦労が多いということを強く感じています。

そういう意味で時代が過渡期であるがゆえの、教育全体の1つの大きな正念場、試練の場かなということも感じております。

そうした中で「曖昧」という言葉がずっと出てきているのですが、それぞれにもう一度ですね、完璧に整理することはできませんし、三者がお互いのことを補完しながらやっていくべきところではあると思いますが、山口部会長がおっしゃいましたように社会教育の中での学校教育という1つの考え方も重要であると思うし、先ほど松野委員もおっしゃいましたけれども、人格形成という意味では、どうやって子どもたちが社会人になるときに、しっかりと生きる術を教えるかというのが、中核にあると思いますし、そういうところを教えることが教育全体の目的であろうかなと思うので、一度整理をしながら、それぞれがうまく機能する仕組みを作っていく必要があるということを皆さん方のご意見を聞いて感じておるところであります。

今回、2回に渡りますけれども、いろいろと整理をしながら、課題をまた浮き彫りにさせていただければなというふうに思います。

それでは、さらにご意見をいただきたいと思います。

次に、「学校・家庭・地域社会の教育機能の役割分担が曖昧になっている」という問題がおこっている原因についてお話ししたいと思います。

先ほどのご自身のご意見等を踏まえまして、皆様方は課題をどのように感じておられるのかご発言
いただきたいと思います。

まずは、教育委員の皆様にお伺いしたいと思います。

松野委員いかがですか？

【松野教育長職務代理】

原因につきましてはいろんなことが複合的に絡み合っており、たくさんあるかと思いますが、私の方からは、「三者が一步踏み込んで連携することに対して、不安とかためらいがあるのではないか」というふうに捉えております。

なぜかといいますと、非常に頑張られて連携というものに今取り組まれて成果を上げていらっしゃいますが、実情を見てみますと学校は先ほどありましたように、多様な事案への対応があり、家庭では多忙の中での子育てがあり、そして、地域では担い手不足などの課題、こういった課題や実情がありますから手一杯な状況で、それぞれが一步踏み込んだ形での連携に取り組むというのは、なかなかきつい状況にあるのではないかとこのことを考えたところです。

そして、そこが踏み込まないままに、学校と家庭は、いわゆるその生活指導としつけの役割分担が曖昧になり、学校と地域では、敷居は低くなったものの、目標の共有や協働活動が不十分であったり、家庭と地域では、双方の連携の手だてがよく見えなかったりするような状況が伺えるのではないかなと考えております。

また、逆に言うとその境界線が曖昧であることが、よく見えてないからこそ、一步踏み出せないでいる状況もあるのではないかとこのように考えるとこもあります。

実際には私自身も地域の一員として、小学校、中学校の様々な活動に参加して、見守りをしたこともあります。先ほど古賀委員さんも言われたように、どこまで踏み込んでいいのか、あるいはどれくらい自分自身が継続的にサポートできるだろうかと、そういったものが、私自身の課題にもなって参りました。

現状としては登下校の見守りとか、学校行事、体験活動などの支援など、保護者とか地域の皆様方のご協力によって、非常に定着しているところもあるかもしれませんが、さらに一步踏み込むためには、先ほどありましたように持続可能な仕組みづくりとか、体制づくりが必要になっていくのではないかと考えているところです。

以上です。

【宮島市長】

はい。ありがとうございます。

古賀委員お願いします。

【古賀委員】

先ほど話もありましたが、「親が学ぶ機会」がもっとあるといいのかなと思います。

「子どもを通して親が学ぶ」ことは子育てを通してたくさんありますが、今はその学ぶ機会というのが減ってきているのかなと思っております。

地域によっては昔遊びをできない高齢者の方が多いところもありますので、地域がお手伝いをするというよりも「子どもと一緒に何かをする」といったことが今後は必要かなと思います。

また、「親として自信がない」という保護者もいらっしゃるかと思います。地域の人、学校、親と一緒にあって子どもたちに力を貸すといった流れになると、うまくいくのかなと思っております。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。

中村委員いかがでしょうか。

【中村委員】

先ほどから大変参考になるお話を聞かせていただいて、コロナでそういう機会もなかったということもあったかもしれませんが、永吉会長の保護者向けのプログラムで親御さんにも学んでいただくということは非常に良いお話を聞かせていただいたなと思っています。

山口部会長からも、社会教育の中で同時に大人を育てなければならないというお話をいただきましたが、その今の課題と同時に解決策みたいなことに繋がるのかなと思ってお話を伺いました。

この問題は、保護者だけが家庭だけがじゃなくて、地域も変わっている、学校の環境も厳しくなっているというところで、今アイデアを生かして、そういう体制を作りながら、先生たちに学校に負担がかかっていることが事実だとしたら、制度が時代の変化についていけないということも、現実なのかなというふうに感じております。

以上です。

【宮島市長】

はい。ありがとうございます。

最後に西沢委員、お願いします。

【西沢委員】

私が幼稚園生と0歳の子どもを育てる親として、「家庭の余裕のなさ」というのは見逃せないなと思っています。

私も働く一人間として、朝からノンストップで働いて、子どもを迎えに行って、帰ってお風呂入れて、ご飯食べさせてとやっている、あっという間に寝る時間になって、「子どものために使ってあげられる時間ってあったかな」と、子どもの寝顔を見ながら反省するような日々を送っていることが結構あります。

皆様のご意見の中でも共働きの中で子どもと向き合う時間がなかったり、話を聞いてあげる時間がなかったりというのは、すごく自分事としてズシンとくるところでもあります。でも、それって誰が悪いわけでもないよなっていうところも実際問題としてあります。

原因として余裕のなさということを挙げていますが、どう解決していけばみんながより良い方向に行くのかなというのは、どの立場から言いたいこともあるし、すごく難しいけれども、この部分っていう

のは、境界線が曖昧になってきている問題を考える上で見過ごせない原因だなと思っています。

子どもも親御さんが必死に頑張っているのを見ていて、「迷惑かけちゃいけないな」とか「心配させちゃいけないな」、「でもちょっと寂しいな」という消化しきれない寂しさや、エネルギーというのが例えば暴力行為につながってしまったり、デジタルネイティブ世代ですので、SNSに走ってしまったりといったことがあるのではないかと想像しております。

今申し上げたことについて、私の中で一番の課題として考えていきたいなと思っています。

もう1点は子どもだけではなくて学校の先生方も、地域の方々も、何か互いに夢を語らいあったりとか明るい未来をただただポジティブに肩の力を抜いて感じたりとか、こうなったら良いよね、楽しいよねって話す場面が、もうちょっとあってもいいのではないかと考えております。

そういう場面が今少ないのではないかと考えていて、前向きに考えようみたいな時間がないことも先ほど松野委員さんもおっしゃっていましたが、一歩踏み込めない理由もその辺りにあるのかなと思っています。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。

教育委員の皆様方からご意見をいただきましたが、教育関係者の皆様方からも、何か原因についてのご意見がございますか。

永吉会長。

【永吉会長】

先ほど西沢委員の方から発言があった内容はすごく私も共感できます。私も本当に時間に余裕がなく、子どもたちに何もしてあげられなかったと感じています。

子育てという時間がおそらく一番子どもと接せることができて、たくさん子どもから愛情をもらえて子どもにも愛情を注がれるということが今になったからこそ分かりますが、当時はもう全くできなかったということがあります。

そういった点でいうと、例えば時間がない親御さんたちに来てもらう場の活用として、例えば「子ども食堂を活用する」ということが考えられます。

働いて家に帰って料理作るとするのはすごく大変な事です。その料理を食べさせてくれる場に行くだけで、やはり2・3時間ほど時間に余裕ができるはずだと思います。その時に親子でいろんな会話をし、その時子どもを抱き締めてあげるなど、何でもいいですが、何かそのような場が活用できればすごくいいなと思いました。

私のところに保護者さんからの色々なご意見などがあります。同じ悩みを持つ親御さんと会話がしたい、例えば、不登校で悩んでいる親御さんは結構いらっしゃいますが、誰に言ってもいいかわからない、どこに相談してもいいかわからないこそ、そのような場をつくる。

別の会でそういう場を持つというお話を聞いたときに、すごく良いなと思い、これはぜひ来年も続けていってくれたらと感じました。

それこそ、いじめとかもそうだと思います。先ほども申し上げましたが、親としたらその時になって初

めて知ることだと思うので、それを経験した親御さんだけが集まり、いろんな忌憚のない意見が話せる。

ただ、人数が増えとなかなか意見を言いつらいので、本当に少人数でいいと思います。マンパワーが必要になって、なかなか難しいと言われるかもしれませんが、少人数でやっていくと、本当に忌憚のない意見が親御さんから出て、それがヒントでいろんな解決策に繋がるのではないかと感じた次第です。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。

何か他にございますか。よろしいでしょうか。

教育長の方からお願いします。

【陣内教育長】

難しいですね。

学校・家庭・地域社会の教育機能の境界線が曖昧になっている原因を一般的に言えば、少子化、核家族化、地域のつながりの希薄化、価値観の多様化、そういった社会構造の変化が複合的に作用しあっていることになると思います。

こう言えば、どれもが原因なんだろうという気はしていますが、1回転して、そもそも、学校・家庭・地域の果たすべき役割の線引きがあったのだろうかと思ったりもします。境界があやふやと言われる前に境界がそもそもあったのかなと。

子どもを育てるとというのが、社会全体の中で第一義的なミッションであって、それぞれができることをする。学校ができることは学校が精いっぱいするし、地域ができることは地域が精いっぱいするし、家庭ができることは精一杯される中で、この辺は学校が得意、この辺は家庭が得意、この辺は地域が得意という中で、自然発生的にその役割分担が作られてきたのかという気がしたりします。

だから、決まっていたものでも何でもないので、今の時代の役割分担をもう 1 回見つめ直さないといけないと思います。

何より大事、何より使命の高い、何より楽しいはずの子育てが二の次三の次になってきているとしたら、そこはしっかりと警鐘を鳴らしていかなければならないし、その上で、また今の時代の自然発生的な役割分担っていうのを探すっていう、今までの役割型に戻すっていうだけではなくて、そういった観点もいるのかなと思ったところでした。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。時間が経過しているようですので、次に進みたいと思います。

「学校・家庭・地域社会が連携・補完をし合う体制づくりについて」でありますけれども、それぞれが役割を果たして、相互に連携をすることが、社会全体で子どもを育む環境づくりにつながるというふうに思うわけではありますが、その連携・補完をし合う体制づくりについて、どのような考え方で、行政に対して、新しい取組などを望まれるのか、またご意見等があれば、お聞かせをいただきたいというふうに思

います。

まずは松野委員から、よろしいでしょうか。

【松野教育長職務代理】

まず体制づくりということになってきますと、教育長が言われたように新たな形での枠組みづくりというのが必要で、それが今日のこの会議から具体的に進み出すというのは、本当にいいことなのかな、これがいい方向へ進んで、新たな枠組みができれば、また新たな歩みができるのではないかなと感じたところです。

いずれにしても、今後いろんなことを検討していく中で、その中身をしっかりと教職員とか、家庭とか、地域の皆様方に周知していく中で、また当然子どもたちにもしっかりと提示していく中で、いろんな取組を進めていくことができればと思っているところです。

学校の機能として特に挙げられているのが社会化機能というのがありまして、子どもが社会に適応するために重要な役割を担っているということで、社会的価値観や、その規範を子どもたちに教えること、他者と協力しコミュニケーションをとり、社会的スキルが身につくように育てること、将来の社会的役割を理解し、職業や社会的整理について学ばせること、自己理解・自己実現を支援することなど、その機能が十分働くように、学校をサポートする体制を構築しないといけないというのが、実際にはわかってはいるのですが、マンパワーの不足などがあって、なかなか難しいところもあるなと考えております。

特に、学校側のマンパワーの不足というのは如実に出ていっているところでもありますので、今現在できる範囲内で支援をしていくということも必要ですし、家庭の方もいろんな面で困っているところがありますので、専門家でありますスクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、あるいはトラブルがあったときにはスクールロイヤーといった色々な専門家の方々にも十分に活躍をしていただきながら、体制づくりをしていかないと考えているところです。

学校のいわゆる暴力につきまして、佐世保市内の方も非常に多くなっているというところのご説明もありましたが、基本的には長い時間をかけて、それぞれ地域の方からのいろんな支援なども必要だと思えます。

やはりそういったことを考える中で、ここ数日ぐらいの(他都市で発生した)暴力動画を見てみると、本当に怒りが込み上げてくるようなところもありますが、この加害の立場にいる子どもたちは実際に今まで何か過ちをしたときに、きちんと叱られて指導されてきたのだらうかなってというのがふと頭の中に浮かんできたところでした。

今の世相というのは、なかなか叱ることが難しい時代じゃないかなというのが1つ感じられるところで、しっかりとそういった叱るところをやっておかないと、最終的に子どもたちがかわいそうな状況になっていくのではないかなというのを感じたところでした。

今日の説明資料の6ページに、学校教育法の第6条の2というのが出されておまして、その中の「学校においては、教育を受ける者が学校生活を営む上で必要な規律を重んずるとともに、みずから進んで学習に取り組む意欲を高めることを、重視して行われなければならない」というのが目につきまして、規律を重んずるということに関しましては、きちんと規律を一定のレベルで守らせるということが必要ではないかというふうに考えております。

きちんと叱るべきところは叱る、そして、子どもたちの学習に取り組む意欲を高めること、これは褒めるということだと思いますが、しっかり褒めるということと叱るということをきちんと捉える必要があると考えております。

そういったことを地道にやっていくことが、今後の子どもたちにとって、しっかりした方向性を見せることができるのではないかと考えているところです。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。

次に古賀委員お願いいたします。

【古賀委員】

松野職務代理が、おっしゃっていただいたことに、私もその通りだなあと考えております。

先日、中学校に通うお兄ちゃんと、小学校6年生の男の子の兄弟を持つ保護者さんとお話することがありました。その中で6年生の男の子が「お前のお兄ちゃん不登校やろう」と言われることがあったそうです。そのことが中学校に上がる子どもにとってはきつい言葉だったそうです。

その話を聞いて、不登校という概念を大人として子どもたちに伝えるときに、不登校ってあんまり良くないことみたいに伝えてしまっていないかなと自分自身反省をしました。

松野職務代理がおっしゃったマンパワーももちろん大事ですけど、色々な価値観と多様性のある子どもたちの居場所づくりも、これからもっともっと大切になってくるのかなと思います。また、大人の親の居場所づくりっていうのも大事になってくるのかなと思いました。

また、保育園の運動会が雨で延期になって、平日に開催したのですが、保護者の方がたくさん参加してくださいました。お勤めの職場の理解も大分増えてきているので、お休みを取りやすい職場になったことで来ることができているのだろうなというのを実感しました。

先生たちの働き方改革にもなるかもしれないですが、平日に運動会や他の行事をすることも、子どもたちのために、時間を使える職場の環境が整ってこれていると感じているので可能ではないかなと思っています。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。

中村委員お願いします。

【中村委員】

今日は課題と問題解決についてということでしたが、希望の持てるところも大事なと思うのでお話をさせていただきたいと思います。

私は会社を経営する立場として教育委員をさせていただいていますが、そんな中で注目したいのは、本市と連携協定を結ばれている大新技研さんという会社があります。そちらではプログラミングを子ど

もたちに教えるなど、企業として社会貢献、地域貢献、青少年育成に取り組まれているのは素晴らしいことだと思います。

それに対して、マスコミの方も報道してくださって市民の皆さんも活動を知ってもらえるということで、とてもいい取組だなと思いますし、それがもっともっと広がっていくといいなと思っています。

子どもたちがそういうのを学んで、1度市外に出ていってもまた帰って来たくなる、そのまま地元に残って就職するといった子どもが増えることが、町の発展にも繋がると思いますし、大新技研さんのような素晴らしい活動もそうですけど、色々な企業、お店の方も各学校の社会体験の授業ということで受け入れておりまして、私たちの会社のエスケイ・アイ・コーポレーションでは宮中学校の生徒さんを受け入れております。

宮中学校では活動体験の発表をされていまして、見させていただいているのですが、親御さんも来られていて、子どもたちは働く人の姿を見ることで、間接的に親の働く姿を想像していると思います。

規模が大きい会社から小さいお店まで、子どもたちを育てることに関わることができているなと思っていますので、こういうことは地域の役割としてもっと広げて、市も取り上げていただければと思いますし、マスコミもたくさん取り上げていただければいいなと期待しております。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。

西沢委員、よろしいですか。

【西沢委員】

皆さんすごく良いことをおっしゃってくださっているので、私個人としてやってみたいと思うことを1つだけ申し上げます。

「地域と学校と保護者が何でもいいのですが、一緒に作り上げて成し遂げる」、全員が達成感を感じることや、頑張ったよねって共感しあえるような機会があったらいいなと思います。

そういうイベントをある地域だけがやるのではなくて、制度的にもう全地域が強制的にでもやるようにできたらいいなと思っています。というのも、働きながら子どもを育てていって、いろんな後ろめたさがありながら地域と関わっていく中で、松野職務代理もおっしゃっていたように、何かこう一歩踏み込むのに勇気がいるので、その一歩を踏み出すきっかけをどうにかして作ったら、色々問題はありますが、絶対にうまくいくと思っています。1回顔見知りになって、1回同じ達成感を味わったもの同士だったら、その後の意思疎通はものすごくハードルが下がると思います。

そういった三者が一緒に何かを作り上げる機会を作っていきたいなと思いました。

理想論ですが、そういったイベントがあったら1つの目標に向かって全員が同じ方向を向けるのではないかと思います。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。

今教育委員の方からそれぞれご意見をいただきましたけども、教育関係者の皆様方からはいかがでしょうか。

まず、松田会長お願いします

【松田会長】

失礼します。

今、皆様方のお話を伺いながら、たくさん心に刺さるもの、共感できるもの、共鳴する言葉が出てきました。

先ほど教育長がおっしゃられた、今の時代にあった役割分担、私も同感といいますか、もうその通りだと思います。

というのが、別室登校している保護者と会って話をします。本当に悩まれています。子どもも別に怠けているわけではないのです。集団に適應するのに、子どもも努力しています。今日はここまでできた、今日はみんなと一緒に給食を食べることができた。そういった一步一步を支援していくことが大事だと思っています。

そう思ったときに、私を含め教員皆そうなのですが、「保護者を 1 人にしない」。家庭の教育力という言葉がよく使われますが、それは保護者を批判する言葉では決してなく、家庭指導でもなく、本来の機能を取り戻す、または新たな家庭の枠組みを支援する、「伴走型の支援」ができないかなというふうに思います。

一生懸命頑張っておられるお母さんたちを助けたいなと思っています。働きながらご飯を作る、お風呂に入れる。睡眠時間を確保しないと、大人になったときに影響が出るってということも聞いたことがあります、寝かしつけることも頑張っておられる。

そこを何とか支援していく体制といったときに、「つながること」が重要だと思います。

先ほど榎尾校長先生がおっしゃったように、以前に比べて関係機関とのネットワークすごく取りやすくなりました。スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーはすぐ派遣してくださり、スクールロイヤーともすぐつながります。行政のサポートのおかげで、子育てに関する関係機関ともすぐつながり相談がしやすい体制ができています。

そういった部分がもっと強固になって、保護者支援、保護者を孤立させないコミュニティ、学校ができることとしたら、コミュニティ・スクールの活性化充実というアプローチの角度もあるかと思いますが、基本的にみんながつながるため、誰かの仕事を誰かに押し付けるのではなく、先ほど教育長がおっしゃられましたが、今の時代に合った役割分担に自然と整理されていくような体制、それを生み出すのはやはり信頼関係だと思います。

信頼関係を作りながら、でもそれぞれ住み分けが自ずと働き、そして学校も学校本来の姿で、子どもたちにしっかりと教育ができるような体制づくりの根っこに信頼関係、つながるところが必要ではないかと思っています。

文科省が去年の 10 月に、学校と教師の業務の 3 分類を新たにグレードアップさせたのを出され、すごいなと思いました。しかしながら、あれを実現するために書いてあるのは、まず取り組むべきところから粛々とやって欲しい、「地域と連携しながら」と書いてありますが、それをするにもやはりみんなとつながっておかないと、信頼関係がないとできません。

互いに依存しすぎない、自立したパートナーシップの地域と学校との関係というのを作りつつ、住み分けが綺麗にできたらいいのかなと思います。そのために学校でできることをやはり模索していく、でも抱え込みすぎないというところを考えていかないといけないなと思いました。

古賀委員さんが「居場所づくり」とおっしゃいました。本当に居場所が必要です。子どもたちはいろんな課題を抱えています。中学校に校内支援センターが設置されており、すばらしいなと思いますし、そこに専任指導員さんがいてくださいます。

担任は別室登校の子どもとつながりたいですが、他にも子どもたちがいるので物理的に難しいです。そういった時に最もマンパワーが必要だけど、最も担任だけにかぶせてはいけない部分だと思います。別室登校というのは、今は学校の中で担任を持ってない者が担っていますが、もしそこに今の中学校に派遣されている専任指導員がいて、保護者との対話も子どもとのつながりも、それから担任と子どもとのつなぎをしてくれる人が1人いるだけで、随分変わってくるのかなと思います。

そういう信頼関係をつくりながら、それぞれがストレスフリーな関係づくりができるような体制というのが基盤としてあればなと思います。そのためにできることはしていきたいと思います。

【宮島市長】

貴重な現場のご意見ありがとうございます。

柳尾会長いかがでしょうか。

【柳尾会長】

失礼します。本当に今日はありがとうございました。

その中で今もそれぞれの方がおっしゃったように、信頼関係というところで、何よりも「お互いの顔を知る」ということが大事かなという気がします。

以前は、保護者同士が顔見知りで、保護者がよその子も知っていたから、仮に喧嘩したときも、もうここで解決する、または私が注意していたとあったところがあれば、今あったように信頼が深まっていくのかなという気がしますし、まず学校の中で考えれば教員同士は当然その年度、顔を合わせていけばともに苦楽をともにするわけですから、同じ釜の飯を食うわけですからもう当然見知ったことになります。

そこに信頼も生まれますが、今度は学校と保護者が、顔をどれだけ知るか、会話ができるかといったところが重要です。お互いが何を考えているのか分からない、表情がわからない、声のトーンがわからないと伝わらないと思います。

それから今現在、本当に地域の方々に色々なお力添えをいただく中で、地域の方々もやはり高齢化していった、もともとされた方々が最後残って数名というようなことが、もうどの学校にも実態としてあると思います。

我々管理職はその方々と顔見知りではありますが、他の職員がその地域の方々とお見知りなのかなという、そこは実はあんまりないのかなと思いますし、何よりもやはりお互いの顔を見る・知ることが信頼につながっていくという気がします。

併せて、やはりいろんな価値観が多様化していったり、尊重されていったりということはもう今の世の中で大事なことですし、否めないところかなと思う反面、ここはみんなが揃ってとか、ここはみんな共通してというところも私たちは大事にする必要があるのかなと思います。

先ほど子育てのところで、私事ですが孫が生まれて、6ヶ月になって、もう本当に我が子のときには「こんなに抱っこもしてないぞ」と思うぐらい、大人4人で1人の子にかかっています。何かしらの言葉かけや、若夫婦がきついときに我々は風呂に入れ、飯を食わせ寝かしつける。これって昔の大家族の中でそういう役割があつてというところなのかなと思ったりしました。しかし、若夫婦が我が家に帰ったときには先ほど西沢委員からあつたように、働いて迎えに行つてとすると本当にその余裕があるのかなと思います。

我が孫だけじゃなく地域とか、子どもたちに何かしらすることが全体の関わりや余裕につながっていくのかなと思いながら、学校現場としてできること、また地域としてできることを共有することということをやはり皆さんと一緒に考えていきながらということをしていかなければならないなと思います。

本当に今日この会に出て、「それぞれの顔を知る」ということをもう1回確認をしていきたいなということを実感いたしました。

【宮島市長】

ありがとうございます。

永吉会長お願いします。

【永吉会長】

本日は本当にありがとうございました。

私も皆さんの意見を聞かせていただいてやはり一保護者として、改めていかなければいけない点や、自分自身での気づきがすごくありましたので、PTA連合会に持ち帰って1人でも多くの保護者に伝えられるように努めていきたいと思っております。

個人的に感じたのは、自分が子どものときに近所のおじちゃんから色々教えてもらったみたいなの、何か今ではあり得ないというか、会話でもどこまで踏み込んでいいかわからないという裏返しというのはその子に対してどこまで突っ込んで物が言えるのかということもすごく通じているのかなと感じております。

今後、色々な施策が進んでいき、佐世保市は近所の方々が、どの子に対してもいろんなものが言えて、それを保護者としてもありがたく受けとめられて、すべて子どもたちの成長につながる。そのような地域になれば、本当に1人でも多くの子どもが「佐世保っていいな」、「また帰ってきたいな」と感じるのではないかと思います。

今後もPTA連合会としても子どもの成長のために、何ができるのかというのを突き詰めていながら、行政の方々や企業の力も借りながら進めていければと感じました。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。

山口部会長お願いします。

【山口部会長】

今皆様の意見を聞きながら、これから必要なことは、善意であつたり個人の努力だけではない、この新しい時代に合った制度、仕組みづくりが不可欠なのだろうなと感じたところです。

具体的な考え方としては学校、地域、それから実務。こちらの3つの段階、これを分担し連携する三者の運営体制、この辺りの構築がこれから必要になってくるのではないかなと思います。

学校レベル・地域レベル・実務レベルとしたときに、学校レベルで言いますと、コミュニティ・スクールがありますので、こちらの学校運営協議会が、学校の方針でありますとか役割分担をさらに進めていき、地域との協働の方向性を決めていく。

それから地域レベルになると、もう少し広域的に小中連携も含めて複数校に跨るような課題、部活動とか学習支援、安全対策まで含めて地域資源を束ねていくというふうな位置付けの組織、そういったものが必要になるだろうと思います。

それから実務レベルで考えたときには、現在自治協議会がありますので、こういったものをしっかり活用し、地域資源を束ねる。例えば、人材バンクであるとか、部活動支援の実務等も担う力を将来的には持つことができるのではないかと考えています。

地域の専門性を通じて、学校に循環させるというところを実務レベルの強化をもって達成できるのではないかなと思います。

これにつきましては、社会教育の拠点としての位置付けもあります地区コミュニティセンターを活用するというのも1つの手ではないかなと思います。自治協議会と連携することによって、さらに運営の確実性というものを担保できるようになるのではないかと考えるところです。

こうした学校レベル、地域レベル、それから実務レベル、こういったことが動き出すことで、学校での調整負担とかも含めてもろもろの雑務等が軽減されるのではないかと、これが持続可能な教育体制の方向性を整えるのに役立つのではないかと考えます。

こうした仕組みづくりを進めるということは、皆様のお話の中でも出てきましたが、現行の行き詰まった制度の中で、次を考える余裕がないような余白がない現状、これに対して関係者の皆さんに余裕を生み出すような取組として機能し始めるのではないかなと思います。

この余白が生まれることによって、次を考えるエネルギーを関係者の皆さんに生み出してくれるのではないかと、そういったことに繋がるようなところを期待しているところです。

以上です。

【宮島市長】

ありがとうございます。

本当に皆様方から意見をたくさんいただきまして大変ありがたく思っています。

なかなか難しい課題でありますけども、しっかり皆さん方のご意見を踏まえながら、また2回目もございますので、またさらに皆様方のご意見を深掘りしていきたいというふうに思いますのでよろしくお願いいたします。

最後に教育長の方からもお願いします。

【陣内教育長】

皆さんの話を聞きながらもう聞きほれていまして、これで終わればいいのになと思ったところでした。

具体的な施策レベルの話は次回になりますので、今回は皆様から学ばせていただいたことの方向性というのを、私なりに総括したいと思います。

まず、改めて「情」というのでしょうか、子どもを育てるというのが、どういったことなのか、どんな大切なことで、どんなに楽しいことで、どんなにありがたいことなのかというのをもう1回確認するような機会が必要だなというのが1つ。また、一人一人の困り感をしっかりと耳を傾けて伴走する機能がいるなということ。

それから、「ダメなものはダメって言わないといけない」ということ。松野職務代理からもありましたが、必要な規律を重んずるとともに、「保護者の方とか地域の方の価値観を整理する」、それは言い過ぎですよ、それは間違っていますよといった整理をするような機能が必要だなということ。

以上の3つが必要だと感じました。

最終的な目標をしっかりと共有して、できなさに共感して、でも間違っているところは違うよと整理をする。こういったことをやっていかなければならないなということを改めて感じました。

それから、持続可能な組織を作るための制度を行政が関与してきちんと作る。行政が1から10まで、一緒にやっていくというのではなくて、地域、学校、保護者が自走できるような組織を行政が責任を持って構築することが必要だと改めて感じました。

また、これまで学校・家庭・地域という言い方をしていましたが、地域の中に「企業」をぜひ入れなければならないといけないと思います。素晴らしい「教育機会」、「教育人材」をお持ちの方々です。ここをどう組み込んでいくかが1つの大きな視点だなと思いました。

次回までに、施策レベルで何か実現できそうなものをブラッシュアップしていきたいと思います。

今日は本当にありがとうございました。

【宮島市長】

ありがとうございます。

改めて今日は本当に良い時間を設けて、皆様方からすばらしいご意見をいただきましてありがとうございます。

先ほど教育長からも触れられましたけども、教育の問題のいろいろな原因が重層的に重なっているということを考えれば、1つ1つそこを紐解いて、対処療法の部分もあるかと思いますけども、そうしたものを1つ1つ解決していくこと。ここがアプローチの1つではないかなと感じています。

今日は教育委員会だけではなくて、総務部、それから子ども未来部、市民生活部、それぞれ関係部長も来ていただいていますけど、行政といたしましても、全員がそれぞれの問題意識というものを、我が事として、想像を巡らせながら対処をしていく必要があるのではないかという意味では、議論をしっかりとみんなで重ねていくことが重要だということを感じています。

1回目については、本日皆様方からいただいたご意見をしっかりと踏まえまして、課題の解決に向けた方向性と具体策について、少し深掘りをさせていただきたいというふうに思っておりますので、教育委員会の事務局におかれましては、準備をよろしくお願い申し上げます。

教育は1丁目1番地と申し上げましたが、これ佐世保市だけではなくて、すべての施策に勝るものはやっぱり教育だと、もうこれ以上のものはないと私は思っています。

それは佐世保だけではなくて、もうすべての世界において共通のことだと思っています。これからも

しっかりとこれからの教育推進に向けて取り組んで参りたいと思っておりますので、どうぞ、引き続きのご指導とご鞭撻をよろしくお願いを申し上げます。

本日は本当に貴重なお時間をいただきましたことに改めて感謝を申し上げます、第 1 回目の教育総合教育会議を終了させていただきます。

本当にありがとうございました。

閉 会